

# 東京農業大学稲花小学校

学校だより【2020年9月23日】第59号



## 南極教室が開催されました

南極の昭和基地と農大稲花小の体育館を結んでの「南極教室」が、9月15日(火曜日)13時半から実施されました。第61次南極観測隊員として1カ月半の調査を行い、すでに南極から帰国された田留健介氏が来校され、司会進行役を務めてくださいました。田留氏が、東京農業大学の校友(卒業生)であることから、農大稲花小での南極教室開催といううれしい機会をいただいたものです。

南極からは医師である小嶋先生が、マイナス15℃という南極の風景に続いて、昭和基地内のクリニックの様子などを見せてくださいました。基地内のクリニックを見せていただけるというのも、滅多にないことでしょう。さらに、「南極には新型コロナウイルスはこないのですか」「南極に隕石がたくさんあると聞きました」などと各組代表の子どもたちの質問に、ほかの隊員さんも加わって丁寧に答えてくださいました。南極には、男性隊員だけでなく、女性隊員もいらっしゃることも、子どもたちの印象に残ったのではないのでしょうか。最後は小嶋先生からクイズを出していただき、子どもたちは興奮気味に解答。ペンギンの歩く様子、シャボン玉が凍る様子、振りまいたお湯が凍る様子、そして美しいオーロラと、貴重な動画には子どもたちだけでなく、教職員もすっかり魅了されました。

南極からの生中継が終わってから、観測隊が冰山から割り取って日本に持ち帰った「南極の氷」を見せていただきました。1～数万年前の雪が降り積もって固まってできた氷の色は白く、水に入れると小さなパチパチという音とともに、数万年前の空気が出てきます。子どもたちは教室にもどってからも、このパチパチという音を聞くという素敵な体験をしました。

南極観測隊の皆様には子どもたちからのお礼のメッセージを、お届けすることになっています。また、保護者の皆様には、この南極教室の様子を動画でもご覧いただく予定です。大人になったら南極に行きたいと書いた子どもたちもあり、子どもたちのそれぞれが、冒険心を胸に自分の夢に向かって進むことを願っています。

お世話になった田留氏、国立極地研究所、第61次南極観測隊の皆様には心から御礼申し上げます。

田留健介氏 <https://www.nipr.ac.jp/science-museum/interview/201911-3.pdf>

国立極地研究所 <https://www.nipr.ac.jp/>

第61次南極観測隊 <https://www.nipr.ac.jp/antarctic/jare/member61.html>

## 念願かなっての稲刈り

9月18日(金)、稲花タイムの一環として、「田奈実習(稲刈り)」を行いました。この校外学習は、東京農大農芸化学科の山本 祐司教授、横田 健治教授、加藤 拓准教授、そして、応用生物科学部食品加工技術センターの野口 智弘教授、そして大学生や大学院生の協力のもと、東京農大の校友(卒業生)の水田(横浜市青葉区田奈)をお借りして実施するものです。昨年(2020年)の1年生は、田植え、田んぼの生き物観察、そしてハサミを使った収穫と、3回の実習を行いました。今年(2021年)は田植えや田んぼの生き物観察はできず、子どもたちにとっては初めての田んぼ行きとなりました。前日は、さぞワクワクしたことでしょう。

新型コロナウイルス感染防止に気を付けながら、まず2年生が到着。水田を貸してくださっている野路さんご夫妻にご挨拶してから、いよいよ、稲刈りの開始です。大人に手を添えてもらいながらでしたが、「のこぎり鎌」を使いザクザクッと力強く稲束を刈りすすめていきました。実は、のこぎり鎌の勢いが余って膝や脛を傷つけないようにと、農芸化学の先生方や森林科学の先生が「防御板」を工作してご準備くださっていたのです。これで足元を守りながらの稲刈り、一人もケガすることなく進みました。先生方のやさしいお気持ちにも感謝ですね。

収穫した稲束は、ひもで縛り、一人ひとりオダに掛けていきます。関東地方ではオダ干しということが多いようですが、地域によってはハザ掛けというかもしれません。大学の先生から何故オダ干しをするのかも教えていただき、また田んぼの周りを一周歩いて田んぼの空気を一杯吸ってから、2年生がまず帰校しました。

一方、1年生は早い昼食を学校で摂ってからの出発です。手に手にハサミをもち、稲刈りというよりは穂刈りでしたが、こちらでも無事に収穫をしました。大学の先生方からは、お茶碗いっぱいのお米の数、またモミを指でこすって玄米にするやり方などを教えてもらい、興味津々の様子でした。帰校は7時間目終了時刻よりやや遅くなり、また、暑い一日でしたが、子どもたちのがんばりはさすがでした。



1年生、そして2年生のご家庭でも、久しぶりのバスによる校外学習、そして稲刈りの話が弾んだことでしょう。多忙な中、貴重な1日を子どもたちの指導のためにご提供いただいた東京農業大学の先生方にも御礼を申し上げます。科学者のタマゴである大学院生のお兄さん、お姉さんも、

子どもたちのあこがれのロールモデルになったかもしれません。将来、子どもたちがお米や食品に興味をもち、さらに学ぶようになることも期待しています。

東京農業大学 応用生物科学部 農芸化学科

<https://www.nodai.ac.jp/academics/app/app/>

## 大学で講義する

本校の教員は、児童への授業だけでなく、担任としての学級経営の経験も豊富です。さらに、授業の改善について研究し、その成果を執筆する教員もいます。

9月17日(木)には、本校栄養教諭梅本が、母校でもある東京農業大学栄養科学科で、管理栄養士としての経験や農大稲花小における栄養教諭としての仕事についてオンライン授業(演習および栄養科学特論)を行いました。本校では自校式の充実した学校給食を提供し、稲花タイムほかにおいても食育に力をいれており栄養教諭の役割も大きいところです。東京農大生も、先輩の活躍に学ぶところが大きいのではないのでしょうか。栄養教諭の役割については文科省からの「日本の学校給食と食育」も合わせてご覧ください。



東京農業大学 応用生物科学部 栄養科学科

<https://www.nodai.ac.jp/academics/app/nutri/>

日本の学校給食と食育

[https://www.mext.go.jp/content/20200713-mxt\\_kenshoku-100003364\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200713-mxt_kenshoku-100003364_1.pdf)

## 横断歩道ができました

農大稲花小学校正門前は、車両が行き交うことから、登下校に際しては教員も道路横断の指導を行っています。農大稲花小の正門前に横断歩道を設置することは、本校の開校前からの希望であり、世田谷警察署をはじめ関係の皆様にもお願いを重ねてまいりました。ご関係者のご尽力もあり、11月ごろ設置とのお知らせをいただいていたのですが、9月17日(木)に横断歩道および横断歩道手前路上のダイヤ型表示の敷設が行われ、翌9月18日(金)より利用できるようになりました。予定より早い設置に驚くやら、喜ぶやらでしたが、子どもたちが元気に横断歩道を渡る姿に安どしています。ご関係の皆様のお力添えにも感謝しております。



### なぜ？ どうして？を大切に

農大稲花小の子どもたちは、物知りです。また、ご家庭の教育力のおかげもあって、いろいろな体験も豊富です。一方、ちょっと気になるのが、「知ってる！」「やったことある！」「(答えが)合ってる！」という子どもたちの反応です。私は密かにこれを「知ってる知ってる病」と呼んでいます。知っているということ、経験があるということ、そして、クイズや問題の答えが合っているということは、素晴らしいのですが、そこで終わってしまうのはとてももったいないことです。知らないことに気づくこと、初めて見たり知ったり取り組んでみる瞬間のワクワク感、間違ってしまったときは何故かを考えてみることは、子どもたちの成長にとって、もっと大切ではないでしょうか。

子どもたちに対して、早く正しく答えることを求めがちです。しかし、私たち大人は、単純な正解を求めるのではなく、子どもたちから何故？ どうして？を引き出す問いを発していきたいものです。何故？ どうして？は、教科書の中だけでなく、毎日の生活の中にもあり、また、毎日の子どもたちの気持ちやふるまいの中にもあります。何故？ どうして？と答えを探して考え、試すことによって、子どもたちの本当の学力そして冒険心は育つと確信しています。

校長 夏秋 啓子